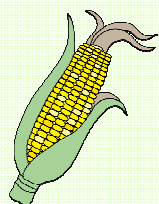
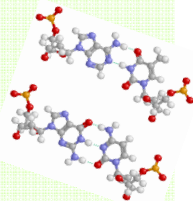


生物は自己の種の保存のために、異種の遺伝子の侵入をブロックする機能、種の壁が働いています。遺伝子組換え技術とは、種の壁を破り、異種の遺伝子を入れ込んで、これまでにない性質を持った生物を作り出すものです。現在商品化された遺伝子組み換え（GM）作物は、主に除草剤を分解する微生物の遺伝子を入れて除草剤をかけても枯れないようにした大豆や菜種、殺虫成分を持つ微生物の遺伝子を入れた殺虫毒素を細胞に含むトウモロコシなどです。



GM作物は自然界にはない、人類が食べたことのないものです。それなのに、十分な安全性の確認のないまま輸入が始まって17年経ちます。この間に危険性がつぎつぎと明らかになっています。たとえば、カナダの医科大学では、検査した93%の妊娠女性の血液や80%の女性の臍帯血からGM殺

虫毒素由来の有害物質が検出され、GM作物に含まれる殺虫毒素は腸で破壊されるので無害という説明が否定されました。ロシアでのGM大豆を与えた母ラットによる次世代影響実験では、妊娠する胎児の数の減少、仔ラットの高死亡率、生き残った仔ラットの成長の遅れや肝臓、腎臓、睾丸に被った深刻な損傷と攻撃性、また母ラットの母性喪失の増加に影響があることを示しました。2012年、フランスの研究で、GMトウモロコシをラットの寿命の24ヵ月間、給餌する実験を行ったところ、4ヶ月目から大きな腫瘍発生がみられ、70%のメスが早期死亡。オスでは肝臓や皮膚に腫瘍が発生し、50%が早期死亡したのです。これまでの安全評価は、3ヵ月間の動物実験に基づいています。私たちが生涯食べて安全なのかは確認されてこなかったのです。



GM作物は現在北米大陸を中心に1億7千万ha以上の土地で生産されています。主な生産地は米国で、米国の大豆の90%、トウモロコシの80%近くが

GMです。カナダのナタネはGMナタネとの交雑でいまではほとんどのナタネがGM汚染されてしまいました。日本の大豆の自給率7.3%、トウモロコシは0%でほとんどを米国の輸入に頼っています。日本はカナダのナタネの最大のお客様

